# 設定原画集

# 設定原画集

# 目次

## キャラクター紹介

6 神之邑 颯真
8 樋野 克
10 識守 章都
12 水樹 結
14 足利 義地
16 横井 史郎
18 神之邑 悠里
19 神之邑 真源
20 識守 南都
21 佐藤 由加
22 時沢 隼人
23 桜花
24 桜樹
25 宮津 琴子
26 実島 流之介
27 かなえ
28 芙子姫
29 野島 良治
30 樋野 草一郎
31 宗方 和清
32 時沢 鳴美（主人公）

## ジャケット・ポスターイラスト

34 限定版ジャケットイラスト
35 通常版ジャケットイラスト
36 ポスターイラスト

## イベントグラフィック

38 イベントグラフィック
43 イベントグラフィックボツラフ

## ボツキャララフ

48 ボツキャララフ

## ショートストーリー

52 夢卜夜話

## 舞台紹介

62 現代全景マップ
64 現代スポット紹介
65 江戸紹介
66 江戸全景マップ
68 大正・室町スポット紹介

## オープニング・エンディング

70 OP歌詞・藤谷桃プロフィール
71 ED歌詞

72 原画担当者コメント
73 ディレクターコメント
74 キャスト・
設定原画集制作スタッフ

# 神之邑(かみのむら) 颯真(そうま)

CV.成田 剣
冷たくクールな主人公の同級生

年齢　：16歳
性格　：冷静で知的。厳しい家庭に育ち、勉学は常にトップでありつづける事を義務づけられている。病弱な弟がいる。
趣味　：チェス
身長　：178cm
体重　：60kg
誕生日：1990年4月27日
血液型：AB型
得意技：神之邑流精霊術（風）

知的系キャラとして最初誕生させました。それだけでは面白くないので、彼の特殊な家庭環境をベースに少し変化を。
実は彼は買い物をしたことがない珍しい人です。
颯真の心情の変化を楽しんでもらえたらと思います。

# 樋野 克

ひの　すぐる

CV.岩田 光央

主人公に密かに思いを寄せる同級生

年齢　：16歳
性格　：明るく活発で異性、同性からも人気。
　　　　面倒見もいい。少し優柔不断なところがある。
趣味　：映画鑑賞
身長　：173cm
体重　：60kg
誕生日：1990年8月6日
血液型：A型
得意技：地龍双銃（地）の使い手

主人公の同級生という位置づけの克。一年の時から主人公の事が好きだけどなかなか言えないじれったいキャラです。高校生らしい恋愛を楽しめるかと思います。ちなみに戦闘服はよく似ているようで実はキャラごとに違いがあり個性を付けてもらっています。

# 識守(しきもり) 章都(あきと)

CV. 松風 雅也

軽いノリのお医者さん

年齢　：32歳
性格　：優しいけれどいい加減な性格に見える。
　　　　何を考えているのか分からない。
趣味　：うまい酒を飲むこと
身長　：181cm
体重　：62kg
誕生日：1974年8月12日
血液型：O型
得意技：術は全く使えない。

年齢的に落ち着いた大人キャラとして作りましたが、軽いノリの人になってしまいました。実は内科医なのですが……。
彼だけ戦闘服がない理由はゲーム本編をプレイして頂ければわかるかと思います。
彼のストーリーの、特に後半は個人的にも気に入っています。

# みずき　ゆい
# 水樹 結

CV.岩永 哲哉

生意気でしっかり者の弟の友達

年齢　：13歳
性格　：生意気な口調だがしっかりしていて、
　　　　実は面倒見のいい性格。
趣味　：ゲーム
身長　：155cm
体重　：48kg
誕生日：1993年6月21日
血液型：O型
得意技：龍神銃（水）の使い手

見た目可愛く、口調は少しガサツな結。実はしっかり者です。
主人公の弟の友達として登場するキャラクターです。中盤に少々びっくりネタがあります。楽しんでくれる事を期待しつつ……。
彼の事が知りたい方は、是非江戸時代に飛んでください。

# あしかが　よしくに
# 足利 義地

CV.千葉 一伸

室町に生きる礼儀正しい術者

年齢　：17歳
性格　：温厚な性格で大人っぽく17歳には見えないほど落ち着いている。沈着冷静。
趣味　：香道
身長　：165cm
体重　：55kg
誕生日：1450年1月7日
血液型：B型
得意技：符術

室町、足利将軍の時代に生きるキャラクターとして登場させました。応仁の乱を描きたかったのですが、歴史の話よりキャラの話を……ということになりました。一番立ち絵の種類が多いキャラではないでしょうか……。彼の幼少時代は必見です。

# よこい　しろう<br>横井 史郎

CV.稲田 徹
大正に生きる軍人

年齢　：24歳
性格　：無口な方であまり多くを語らない。
　　　　どちらかというと不器用な人。礼儀正しい。
趣味　：なし
身長　：182cm
体重　：62kg
誕生日：1894年4月30日
血液型：B型
得意技：剣術

なんだかんだ言っても外せない大正時代。彼はそこで生きる軍人として誕生しました。当時マントは雨具として着ていたようですが、外せないアイテムの一つということで着せてみました。彼は海軍ですので、もちろん白い軍服姿も出てきます。

# 神之邑(かみのむら) 悠里(ゆうり)

CV.入江 健夫
颯真の弟

年齢：12才、中学１年生
性格：温厚で優しい性格。病弱であまり外出しない。兄を慕っている。
身長：162cm
体重：53kg

颯真の弟として誕生しました。病弱で優しい彼は、自分が兄のお荷物になっているのではないかと不安に思っています。
それが主人公達が過去の時代に干渉してしまう事で、現代が変化し、悠里自身も変わっていってしまうのですが……。

# 神之邑 真源

かみのむら しんげん

CV.入江 健夫

颯真たちの宝玉の先祖

年齢：12歳
性格：室町時代の都に住む公家で術を操る。
少しわがまま。
身長：160cm
体重：50kg

名前の通り颯真のご先祖様です。悠里に似ています。性格は違いますが……。ちょっと腹黒いような部分もあったりなかったり。

# 識守 南都
しきもり　みなと

CV.川淵 由香里
章都の双子の姉

年齢：32歳
性格：男勝りで独身。
身長：178cm
体重：59kg

章都の双子のお姉さん。ある意味章都より男性らしいキャラ。
よくよく考えると彼女以外にもたくましい女性キャラが多い気が……。
彼女の職業は私の趣味で。

# 佐藤（さとう） 由加（ゆか）

CV.祭田 絵理
主人公の親友

年齢：16歳
性格：明るく前向き、オカルト好きでスポーツ大好き。
身長：165cm
体重：52kg

オカルト好きで活発な主人公の親友として誕生しました。
意外と世話好きで面倒見のいい子です。
気が強いというよりは自分の意志をしっかり持っている感じでしょうか。

CV.笹沼 晃
主人公の弟

年齢：吾妻中学校　2年　13歳
性格：ワンパクで元気のいい弟。
身長：165cm
体重：55kg

今時いそうな中学生にするよう心がけました。
主人公は隼人の前だとしっかりしたお姉さんに。
それに甘える部分を少し出してみました。

# 桜花（おうか）

CV.伊藤 葉子
宝玉を護る式神

年齢：見た目は25歳
性格：義理堅く冷静に物事を判断する。
　　　桜樹の姉または母親のような存在
身長：172cm
体重：55kg

桜樹と桜花はセットで考えました。桜樹に対し桜花はどちらかというと男性的な口調ですが母っぽいような……そんな人です。真面目で、内心いつも桜樹のことを心配していそうな性格ですね。

CV.影平 隆一
匡時の式神

年齢：見た目は25歳
性格：女性っぽい口調で物腰豊かな性格だが、
戦いになると変わる。
身長：178cm
体重：62kg

最初は普通の口調だったのですが、他キャラとの差別化、特徴を出すため女性的な感じになりました。
戦うと怖いのですが。ちなみに桜花より術力は上です。

# 宮津 琴子

みやづ ことこ

CV.田中 愛子
義地と行動を共にする術者

年齢：18歳
性格：残忍で冷徹。自分のために行動する。
身長：158cm
体重：45kg

憎まれ役というか敵役という事で誕生したキャラ。最初はそんなに悪くない人だったのですが、動かしていくうちに邪悪な人へと変わっていきました。でも彼女の事も分かってあげてくれるとうれしいです。

CV.加藤 将之
史郎の友達

年齢：24歳
性格：面倒見がよく人当たりがよい性格。
明るく交友関係も幅広い。
身長：171cm
体重：61kg

ご覧の通り大正時代の人で、史郎の親友として登場します。史郎とは対照的で人付き合いもよく、誰からも親しまれるような人。どうして流之介が攻略できないのか、と言われるかもしれませんね……。
なかなかいい男です。

# かなえ

CV.辻 あゆみ
草一郎の家に住む子供

年齢：10歳
性格：甘えっ子で寂しがり。
身長：140cm
体重：30kg

克が自分を変えていくきっかけとなるキャラとして、草一郎とかなえがいます。かなえはたどたどしい話し方で、時にはヤキモチをやいたり、泣いたりすねたり……子供らしく作れたと思っています。
エンディングは驚いていただければうれしいです。

# ふさこひめ 茀子姫

CV.壱智村 小真
伊勢から使わされた術者

年齢：16歳
性格：温厚で冷静だが強くありたいという思いは誰よりも強い。
身長：150cm
体重：40kg

この頃伊勢がどれほど力を持っていたかは分かりませんが、神秘的なイメージと、術者として相当な力を持ち、姫のような落ち着いたキャラを作りたかったので伊勢という設定を付けました。彼女のこだわり……を、理解してあげてやってください。

CV.楠田 敏之
江戸の簪職人

年齢：35歳
性格：面倒見がよく世話好き。困った人をつい助けてしまう。
身長：168cm
体重：58kg

江戸と言えば必殺○○人……というのは古いでしょうが、そこからイメージしました。人は殺しません。いい人ですよ。
簪（かんざし）を作る職人さんですが、今でいうクリエイターでしょうか。ネタを産みだすのは大変なんです。

# 樋野(ひの) 草一郎(そういちろう)

CV.西松 和彦
大正時代で出会う老人

年齢：65歳
性格：頭が硬く気質も荒いが、話の分かる老人。
身長：160cm
体重：58kg

大正時代でも現代でも、やはり老人は物知りで余裕があるというか、若い主人公たちのよきアドバイザーだと思います。
草一郎のじっちゃんもそんな人で、とても懐が大きい人です。

CV.屋良 有作

年齢：43歳
性格：規律正しく真面目で曲がったことが嫌い。
身長：172cm
体重：64kg

最初から漢らしく大佐と呼ぶに相応しい軍人として考えていましたが、キャスティングが決定してからさらにその渋さが向上したかと思います。
とても真面目で一途な考え方の人なんじゃないでしょうか。

※デフォルト名

# 時沢(ときざわ) 鳴美(なるみ)

年齢：吾妻高等学校　普通科　2年　16歳
身長：162cm
体重：46kg

才女ですが何か特別な力があるような子ではなく、そのあたりは普通を目指しました。
勉強が出来る設定にしたのは、私自身が日本史が大嫌いだったので、もし過去に行くなら少し知識があった方がおもしろいかなと思いました。結局室町や大正あたりで才女ぶりを少し出した程度になってしまいましたが、それ以外は普通の女の子として描けたのではないかと思っています。

# ジャケット・ポスターイラスト

# 限定版ジャケットイラスト

# 通常版ジャケットイラスト

ポスターイラスト

# イベントグラフィック

颯真登場シーンです。学生服を着せる予定だったのですが学校帰りということで私服に。
手に持っている本は主人公の落とした本です。

颯真と出会ってその後夜に悠久ノ桜に行くと、颯真と見知らぬ男の子が。
そんなシーンです。颯真はちょっとすねているというか、いらついている感じですね。

克の過去時代へ行った時のイベントから。じっちゃんの家でつい鳴美の手をさわってしまったシーンです。なかなか初々しいイベントです。

克登場シーンです。クラス替えの日に早く行って主人公と同じクラスかチェックしていたところにばったりと。少し照れているのが分かると思います。

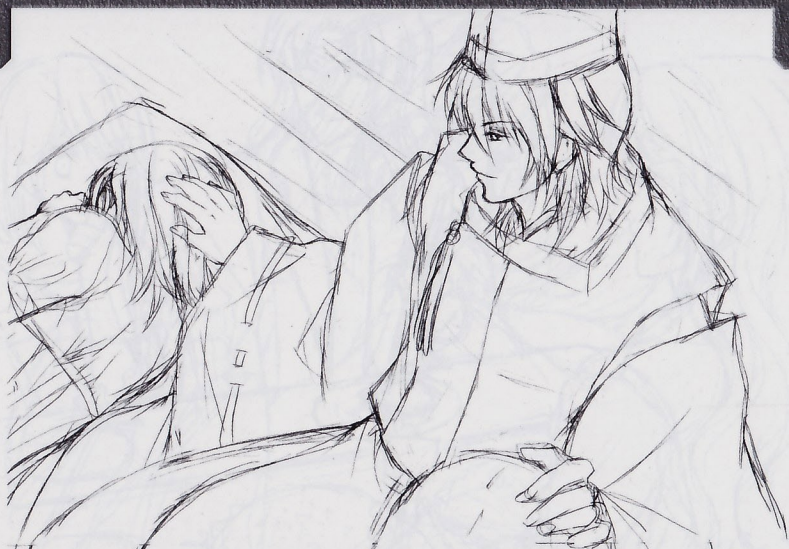
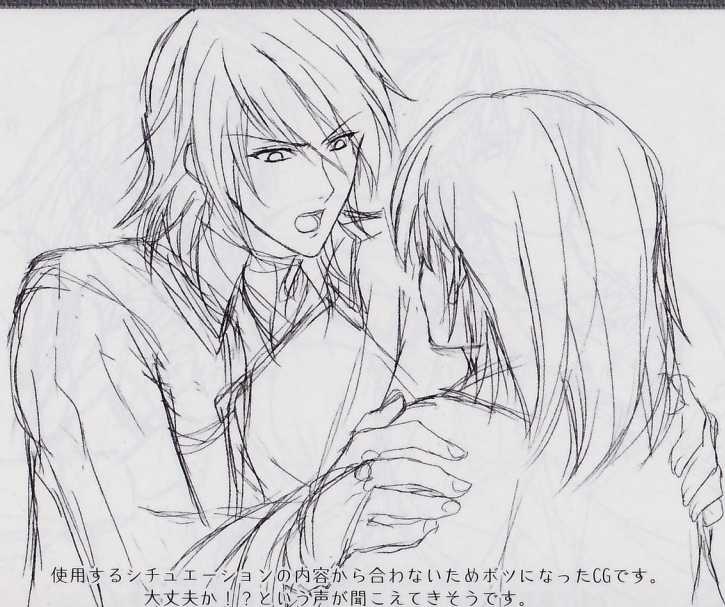
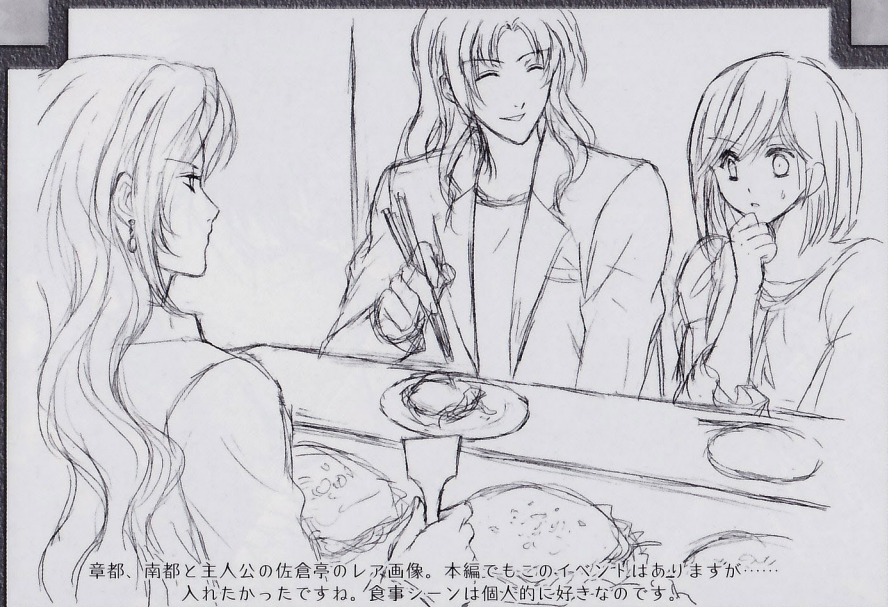
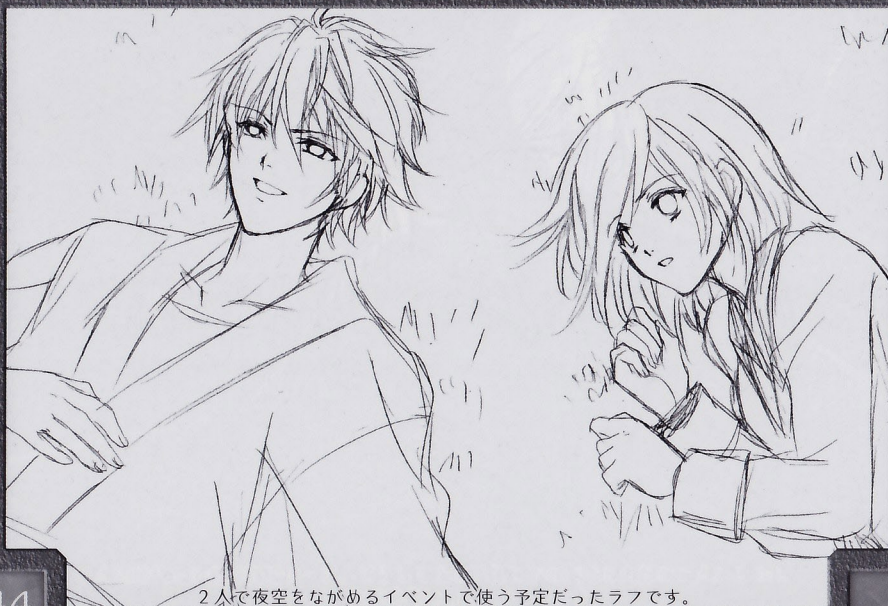
章都登場シーンです。赤信号で渡ろうとする鳴美を抱きかかえる所ですが、
このあとなかなか手をはなさないのです。

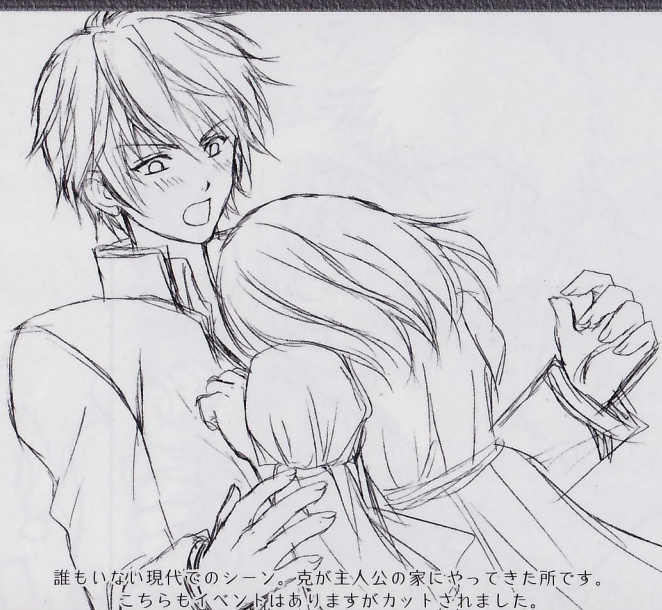
義地登場シーン。悪そうですねえ……。向こう側で構える桜花と桜樹との戦闘シーンが
あります。義地は元々強いのですが、宝玉パワーでさらに倍増です。

偽名を名乗っての登場シーンです。いい人っぽいですね。けどこの後……ちょっと悪さをします。

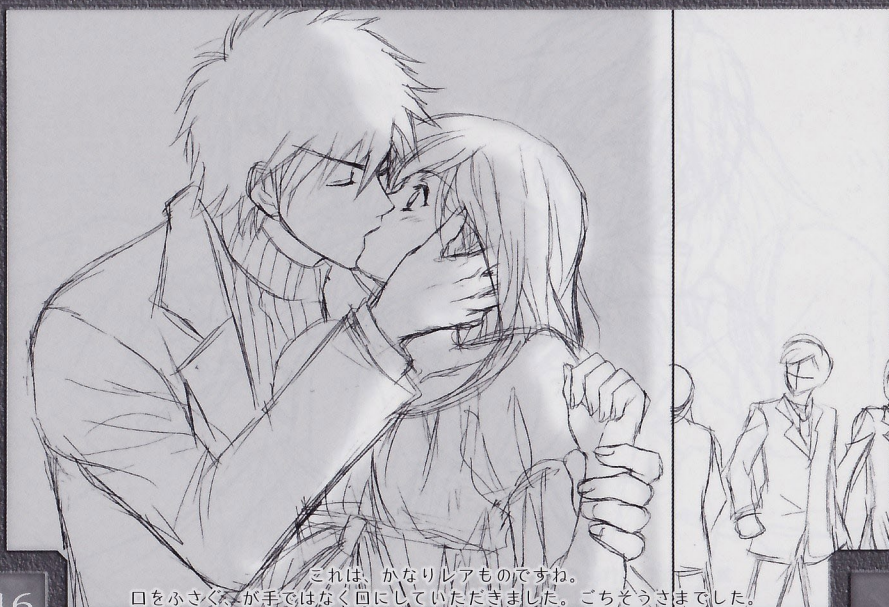
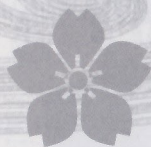
結の登場シーンから。隼人が「おれの彼女」といって紹介します。
女の子っぽいですよね。でもしゃべると全然男の子なんです。

現代で出会う史郎とのシーン。あやしい仕事をしている人です。

大正時代での史郎登場シーン。どうして上の画像と下の画像と史郎が二人いるのか
……は、大正時代に行くと分かります。

颯真が室町にいって、戦闘後の鳴美に語りかけるシーン。都合によりボツになってしまったのですが……実は着色までしてしまったという……。お披露目がいつか出来るといいのですが。

使用するシチュエーションの内容から合わないためボツになったCGです。
大丈夫か！？という声が聞こえてきそうです。

章都、南都と主人公の佐倉亭のレア画像。本編でもこのイベントはありますが……
入れたかったですね。食事シーンは個人的に好きなのです。

2人で夜空をながめるイベントで使う予定だったラフです。

「しまった、子供だった!」と音声頂いた後あわせてみて気が付いて描き直したためお蔵入りになった画像。

誰もいない現代でのシーン。克が主人公の家にやってきた所です。
こちらもイベントはありますがカットされました。

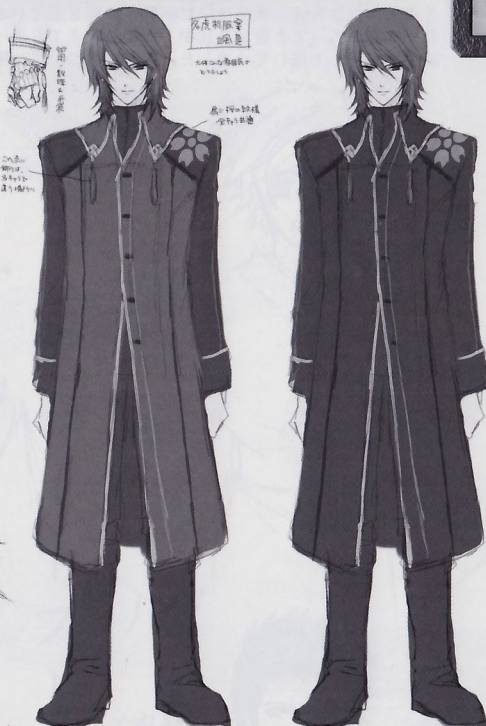
最後の方のシーンから。こちらは別バージョンにて本編収録してます。
どうしても足を組んで座らせたかったのです。

これは、かなりレアものですね。
口をふさぐ、が手ではなく口にしていただきました。ごちそうさまでした。

# ボツキャラフ

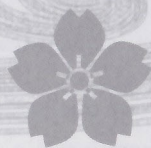
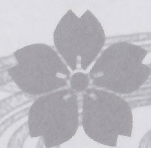
＜颯真＞
雰囲気は今と同じですが、このとき着ていた服がボツということで。こういうスーツタイプ似合いそうですよね……本編では着物が多くなってしまいました。→

＜鳴美＞
最初にもらったデザインより今の方が髪が短くなった感じですね。たしか主人公の髪のデザインは何度か描き直して頂いた記憶があります。
↓

＜章都＞
髪の毛を束ねていた設定ですが、彼の設定を考えてほどいてしまいました。
そういえばタバコはどこにいってしまったんでしょうか……。→

＜颯真＞
最初の頃の戦闘服・名虎デザイン。わりと落ち着いてます。『名虎』については本編でもいきなり『名虎』という単語で出てきますが、名前の由来はある事をすると分かる仕掛けになっています。

→

←＜克＞
最初ショート丈の上着で案を頂いていましたが、どうしても上着はなびかせたかったので長いタイプに変更してもらったものです。
こうみるとけっこう強そうです。

その他色々な方達。芙子はなぜか現代の服を着ています。髪型も違いますね。貴重です。あとは何と言っても設定を途中で大幅に変えてしまった良治です。最初は子供の設定で結の友達として描いていました。流之介については服装、真源は顔を変更しました。

# ショートストーリー

# 夢卜夜話（ゆめうらやわ）

「いってきまーす！」
「ワンワン、ワン！」
「はいはい、クロもね、いってきまーす」
玄関脇の犬小屋の前で、千切れんばかりに尻尾を振る白い愛犬。
慌てて門扉を閉めたせいか、時沢 鳴美は勢い余って、小脇の『真録・太平記』を放り出しそうになってしまった。
「ああ、もう……」
図書館から借りっ放しだったこの本に気付いた昨晩。返却期限が気になって、手に取ったのが間違いだった。読了も近付き、そろそろ寝ようと時計を見たら——なんと遅刻するかしないか、ギリギリの時間帯！
急いで本を鞄に仕舞った鳴美は、通りを全力で走り出した。近道を急げば、間に合うかもしれない。
「近道、近道……」
誰ともなくつぶやいた鳴美は、公園の中に駆け込んでいった。

そこを吹く風は、まだ少し冷たい。
携帯電話で時間を確かめた鳴美は、一つ安堵の溜息を付いた。茂みの中を突っ切って行くことになるから、普段このルートを使う事はない。しかし今、１０分のアドバンテージは貴重だ。
小枝を掻き分け、低木の茂みを鳴らしながら、広場に飛び出した瞬間。
「わあ……」
見慣れたはずの美やかな光景が、鳴美の視界に飛び込んできた。
つむじ風の中、ある時は鎌首をもたげ、ある時は細波となり……きらきら光る銀斑達が、群を成して踊っているのだ。
群からはぐれた銀斑達が、鳴美の元にすり寄ってくる。すくい上げた掌には、銀斑——桜の花びらが、頼りなげに息づいていた。
見渡せば、遊び相手がまだ来ない、つまらなそうな遊具達の頭の上にも、背中にも——。
「ひょっとして、寂しいのかな？」
鳴美は花びらを追いながら、風上の一区画に向かっていった。顔を出すと、そこには桜の樹々が、主とも見える巨大な古木に寄り添うように立ち並んでいる。歓迎のつもりだろうか、はらはらと舞う銀斑達が、鳴美の体を取り巻いた。
「きゃ、ちょ、ちょっと……」
渦巻く風に乗った銀斑達が、頬を、耳を、鼻の頭を——はしゃぐように、くすぐるように触れていく。
苦笑った鳴美は、何気なく空を見上げた。立ち込める薄桃色の花霞が、視界の限りを被ってくる。
何だか、捕り込まれそう——思いも寄らない恐怖を覚え、微かに身震いした瞬間。鳴美は桜の枝元に、不思議なものを見留めた。
薄桃色の中、突然浮かんだ鮮やかな緋。
時折横切る銀斑のせいか、それがスーツの色と分かるまで、かなり時間が掛かってしまった。
それから覗く白い肌と、朝日を弾く、銀色の髪。……逆光のせい？
何度か目を擦ってみたが、その人影が消える事はない。銀斑の一陣が、鳴美の視界を横切った。
「う……」
花霞の向こうで、枝元の人影が、突然木の幹にもたれ掛かる。そのまま、背中、肩、腕、喉……まるで影法師が溶け合うように、人影は幹の中に溶け込んでしまった。
「あっ！！」
風が止んだせいだろうか。消えゆく霞をさらに追い散らすよう、凄烈な光が差し込んできた。慌てて目を背け、再び目を強く擦る。
視覚に残った瞬きの向こうで、銀斑達も、力を無くして地に散っていた。
溜息が、零れ落ちる。今、見えるのは、現実のみ……。
「……はっ……」
慌てて走り出す鳴美の背後で、桜がざわりと蠢いた。

あの瞬きが、頭に残ってるのかな——親友の耳がぴくりと動いて見えた刹那、鳴美はちょっと後悔した。
「公園でユーレイ見たかも……だって？」
休み時間の喧騒の中、鳴美のノートをめくっていた佐藤 由加が、急に居住まいを正す。
「ま、またそんな……由加ってば、大袈裟だよ」
「大袈裟なモンですか。現実主義者のあんたの口から、そんな単語が出てくるとは……ささ、包み隠さず状況を話すべし」
「……ごめん、やっぱりいいわ」
「何がいいのよ！　いーからそこに座りなさいっ」
こうなると、話を切り替えるチャンスはない。何も学年中から『真性』と認定された重度のオカルトマニアの前で、話を漏らさなくてもいいようなものだ。しかしあの公園で見た夢を、未だ引きずっているせいか、今日はいつにも増して、ポカが多い。
身を乗り出してきた親友に気圧され、鳴美は思わず後退った。
「で……見たのかい？」
「いや、その、見たというか……」
「いい加減な事言っちゃダメだよ？　もしそれが『悠久ノ桜』の幽霊なら、除霊は難しくなるなー……」

流行りの宝玉ストラップを指でくるくる回しつつ、由加は厳かに言い放った。
「とわの……桜？」
「あれ、知らなかった？　あの区画のど真中にさ、一際大きな桜があるでしょ。その木の名前よ。あんたが見たのは、恐らくその幽霊だと思うんだ」
由加の調査によれば、その『悠久ノ桜』の幽霊は、通常満月の時に現れ、ひたすら何かを待ち続けているらしい。
有能な霊能者が、何度か除霊を試みたらしいが、未だ誰も成功していないという。
「色々説はあるんだけど、一番有力なのは、『根元に埋まったオットの遺体を、復活させる時を待ってる』らしいのよね」
「……何かどこかで、そんな本を読んだ気がするんだけど」
「そのヘンのヨタ話と一緒にしないように」
「はぁ」
「でもなぁ……遭遇する為、こんなに心砕いてるあたしが見る事できてないって言うのに、なんで無関心なあんたが見る事できるのかね？」
幽霊と決まった訳じゃないんだけど……鳴美の脳裏にうっすらと、スーツの緋色が甦った。
ああ、そうか──幽霊というには、印象が強すぎるのだ。
だが人間であるとするなら、木に溶け込む事などできるはずもなく、ならアレは……結局なんなんだろう？？
「ちょっと、鳴美？」
「あ、はいはい」
「なるほどねぇ。今日はずーっとその事考えて、ぼんやりしていたんだ」
「……できれば、見る権利を譲ってあげたかったわ」
「ホントそーだよ……ん？」
「何？」
「そういえば、そろそろ花見の季節じゃない？」
「そうだけど……それがどうかした？」
「ま、あたしに任せなさい。悪いようにはしないからさっ！」
何か、引っ掛かったのだろうか。
我が親友は、月齢がどうの、花見がこうのと呟きながら、携帯電話をいじり始めた。

──何処までも続く花霞の向こう側に、あの緋色のスーツが見える。
「あ、あのっ……！！」
必死で搾り出した問い掛けが分かったのか、それはゆっくりと振り返った。
その顔、はーー。
「ゆ……由加っ！？」
慌てて立ち上がった背後で、ものが倒れる音がする。息を詰めたまま周囲を見渡すと、そこは自分の部屋だった。
どうやら学校から帰って今まで、転寝をしていたらしい。机上に広げた『真録・太平記』のページは、今朝方から、少しも進んでいない。少し離れた所では、座っていた椅子が倒れて転がっていた。
「夢かぁ……」
溜息を付いた鳴美の目端に、夕日の色が映り込む。窓に近寄り、カーテンを手に取ると、あの桜群のシルエットが見えた。
「…………」
カーテンを引き、椅子を元に戻す。
机上の本を閉じた鳴美は、大きな溜息を一つだけついた。

「おい、ねーちゃん、さっきすげぇ音したけど……」
二階から、弟・隼人が降りてきた時、鳴美は戸棚の引き出しを漁っていた。
「ねーちゃん？」
「わわっ……は、隼人！？」
「何してんのさ？」
「突然脅かさないでよっ」
「ナンもしてねっつーの」
「……あんた、クロのリード何処にやったのよ」
「おれの部屋。だって散歩、おれの番だっただろ？」
「早く持ってきなさいよ。私が代わりに行ってあげるから」
身支度を済ませ、隼人からリードを受け取った鳴美は、宵の近まった玄関に出た。往来には、会社帰りの社会人に混じって、部活帰りの三鱗高生がちらほらと見える。
……由加の幽霊話になど、興味はない。私はあくまで、クロの散歩に行くんだから！
一つ頷いた鳴美は、大喜びのクロを連れ、公園に向かって走りだした。
それでも、テニスラケットを抱えた女子学生を見ると、由加かと思ってすくんでしまう。
「ワンッ！」
「わ、分かってるって、さ、行きましょっ」

はたして、宵の口に立つ桜の木々は、妙な倦怠に満ちている。
朝方に見た、冷たく清しい気風が嘘のようだ。もう少し体をずらしてみると、桜群の中でも一際大きな木が、物憂げに立っている。
「『悠久ノ桜』、かぁ……」
零れ出た呟きに合わせ、一陣の風が鳴った。走り回っていたクロが突然、鳴美の側に駆け寄ってきた。
「クロ……？」
設えられた外灯に、光がほわりと灯った瞬間、影がゆらりと現れたのだ。まさしく、今朝方のものと同じ姿──人工の光ににじんではいたが、その銀髪は見紛うはずも無い。
「う……」
零れた呻きに気付いたのか、凄烈な視線が、じろりと鳴美を睨む。クロが一足、後退った。
「こっ……こんにち、わ……」
聞こえていないはずはない。……が、何の反応も無い。
由加がいれば……と、唇を噛んだ瞬間。突然、黒い影がひゅっと風切り、鳴美の視界を横切った。
「ワンッ！」
鳴美が制するより早く、弾けるように動いたクロが、影を追いかけ、飛び跳ねていく。
「ワン、ワンワンッ！！」
「うわわっ……こ、こらクロっ、ダメっ！　クロっ！！」
「クーン……」
不満げな声を上げて、クロが影を転がしてくる。外灯の光暈に、その姿が見えた時──鳴美は思わず、大声で叫んでいた。
「サ……サッカーボール！？」
「すみませーん、今、サッカーボールが……って、あれ？　時沢？」
藍色の闇中から、制服姿の樋野 克が現れた。
「ひ……樋野……くんっ……」
「ど、どうしたの？　何か、顔色が……」
一年の頃から聞き慣れた、のんびりとした声。鳴美はその場に、座り込んでしまった。

一人掛けのベンチに座った鳴美の側に、缶ジュースを抱えた克が駆け寄ってきた。
「少しは、落ち着いた？」
「ごめんね……びっくりしたでしょ……」
「……時沢が大丈夫なら、何でもいいよ。はい、これ」
苦笑いを浮かべつつ、克は鳴美に、缶ジュースを差し出した。指が触れると、克はつと顔をそらす。
「ありがとう……でも樋野君、こんな時間に何してたの？」
「え……っとね、ちょ、ちょっと広場で自主練習してたんだっ。ほら、県大会が近いでしょ」
「あ、そっか。そういえば、そうだったよね」
慌ててジュースを飲む克の向こうを、そっと覗いてみる。銀髪の人は既に消え果て、後にはちらほらと、桜の花びらが舞い落ちているだけだ。
「あ、ご、ごめん！　そういえば、クロがボールを……ほらクロっ、ボール返して」
「ワフッ、ウルルル……」
「だ、『ダメ』じゃないでしょ！　それは樋野君のボールっ！！」
「あはは……今日はいいよ。どうせもう、帰ろうと思ってたし」
花壇の縁に、克はぺたんと腰を下ろした。『許可が降りた』と悟ったのか、嬉々と尻尾を振って、クロはボールとじゃれ始める。
「県大会かあ……由加のテニス部も、そうだったっけ」
「そういえば、テニスもそうだったかな」
「凄いよねえ。樋野君、レギュラーなんでしょう？」
「まあ、ね」
みるみる赤くなった克は、ふいに桜の方を向いてしまった。何か、悪い事でも言っちゃったかな？　──等と思っていると、再び克は、こちらに向き直ってきた。
「そういえばさ」
「な、なあに？」
「時沢、ここの桜の幽霊を見たんだって？」
「ええっ！？」
「何か、佐藤が喋りまくってたよ？　時沢に見えたんなら、自分にも見えるはずだって。メチャクチャ気合い入ってたからなあ、満月があああだとか、花見がどうとか、色々話してくれたよ」
「ゆ、由加のやつう、一体なんて事を……」
「で……見たの？」
「幽霊じゃないわ。今だって、そこにいたんだからっ」
「そこって……」
桜群を指差し、柳眉を寄せる克に、鳴美は思わず詰め寄った。
「確かに髪はプラチナブロンドだったけど、ちゃんと足もあったし、赤いおしゃれなスーツ来ていたし。幽霊があんな格好、しているはずがないもんっ」

「分かんないよ？　もし口裂け女だったら、赤い服着てて正解じゃない」
「残念ね、マスクしていませんでしたっ」
「でも……」
「え？」
「ここ、公園のど真ん中でしょ。見晴らしもいいし……すぐそこに立っていたんなら、猛烈な短距離ダッシュでもかまさない限り、おれにも背中くらいは見られたはずなんだけど」
「…………」
「……ダッシュばーちゃんだったりして」
「もおっ、樋野君ってばっ！！」
「あはははは、ごめんごめん……」
「もう知らないっ」
「え？　あ、ちょっと時沢……ご、ごめん、ごめんってばあ！」

「もうっ、樋野君のばかっ……」
幽霊話だけでも十分ナンなのに、口裂け女だの、ダッシュ何とかだの――謝る克を置き去りにしたまま、鳴美は家路を急いでいた。
街灯はあるのだが、この辺は住宅街だから、時間を逃すと人通りが少ない。路地を抜ける風の音が、妙に背筋をぞくぞくさせる。
鳴美は携帯電話を取り出したが、ちょっと首を傾げると、そのまま黙ってしまい込んだ。クロも連れているし、何より隼人のゲームの邪魔をすると、後がうるさい。
「大丈夫よねー、クロっ」
「ワフン……」
先行くクロといえば、先ほどから妙な上目遣いで、ちらちら自分を振り返っていた。
「……分かってるわよ。明日学校で日野君に会ったら、きちんと謝るわ」
「ワフッ」
「……ちょっとムキになっちゃっただけよっ。ごめんなさい、私が悪かった！」
「素直に謝れる性根は立派だ」
「キャンッ！！」
何の前触れも無く、突然背後から掛かった声。クロが私の側に飛び寄った。
「かっかかか、神之邑君！？」
「だが、心当たりが無い謝罪を、そのまま受け取る訳にはいかない。一体何なんだ、言ってみろ」
「な、何って……」
突然の事に視線が泳いだ矢先。颯真が小脇に抱えた本を見て、鳴美は目を丸くした。
「……神之邑君？　その本は？」
「ああ、これか」
颯真は小脇の参考書を見ると、小さく溜息を付いた。
「さっき、本屋で買ってきたんだ。中学の弟に……悠里に、勉強を教えてやる為に」
「ああ、悠里君に……」病気がちな弟に、勉強を教えてあげる為の参考書。
私ったら、狸が化けたとでも思ったのかな――あまりの馬鹿馬鹿しさに、自然と笑みがこぼれてくる。必死で笑いを噛み殺していると、颯真の柳眉がぴくりと動いた。
「お前……」
「え？」
「ついさっきまで、公園の……あの桜群の側に……いなかったか？」
「いたけど……な、何で分かるの？」
「いや……ついてるからな、いろいろと」
「い、いろいろ！？」
再び、颯真の視線に力が籠る。すぅと伸びた指先が、首筋にそっと触れた。
「かっ……神之邑君っ……？」
「じっとしろ」
冷たい指が、前髪に迫る。優しく突付くようにもう一度、さらに、もう一度……。
「あ、あの……」
「ほら」
薄目を開けた鳴美の視界に、突き出された颯真の指が見えた。良く見ると、指には桜の花びらが摘まれている。
「しおれた花弁は、服に付くと汚れの原因にもなる。家に入る前に良く落としておくがいい。じゃあな」
「どっ………どうも………」
自失気味の鳴美をそのままに、颯真は踵を返し、そのまま闇に消えていく。
困ったクロがリードを引っ張るまで――鳴美はそのまま、立ち尽くしていた。

私って、こんなに怖がりだったっけ？
やっとの思いで家に帰り着いた鳴美は、辛うじてシャワーを浴び、パジャマに着替えて、そのままベッドに倒れ込んだ。

今時『幽霊』など、マセてる子なら、小学生でもせせら笑うシロモノだというのに――。
　「…………」
ふと気付くと、カーテンの向こう側が、ぼんやり光っているように見える。鳴美は枕を抱き締めると、大きく深い深呼吸をした。
わざとのんびり手を伸ばし、目覚まし時計を確認する。
まだ十分に、真夜中だ。
体を起こしてカーテンをそっとめくると、光の正体が一望できた。
遠目に見える、公園の桜群。薄桃色の彩雲の上、あの銀髪の女性が、ゆっくり手招きをしているのだ。
　「一体、何をしたいのかしら」
　「さあね」
隼人の声じゃない。
振り向くと、見知らぬ男が鳴美の椅子に、足を組んで座っていた。
　「お前を呼び付けたいらしいが……夢の中では、俺の力が勝っているんでな」
　「そうなんだ」
男の口から、ふふっ、と忍び笑いが漏れた。
　「怖がらないのか？」
　「今、あなたが言ったじゃない、『夢の中では』って。それなら何でもありでいいし、驚く事なんか何もないわ」
　「不思議な女だな……融通の利かない堅物のようだが、時折、妙に柔軟になる」
　「私を知ってるの？」
　「ああ。お前は忘れているだろうが……ずっと以前、知り合いだった」
　「ふーん……ねえ、あれが何だか知っている？」
　「知りたいか」
　「ええ」
　「困ったな。あれには、近づかない方がいい」
　「あんまり、困ってるようには見えないけど……」
立ち上がった男は、鳴美と並んで、窓の外を見通した。相変わらず、彩雲からの手招きは続いている。
　「なら少しだけ……あれに関わる事で、これから先につながる光景を見せてやろう。後はその場で……自分で選んでいくがいい」
男の腕が、鳴美の胸元に真っ直ぐ伸びる。
強い力で、突き飛ばされたと感じた瞬間。鳴美の体は、壁の向こう――外に、放り出されていた。

薄絹のカーテンを、するりと潜るような感じ。激しく揺れた視界が落ち着いてくると、鳴美は一人、土の地面に立ってた。
見えるものは、真白な月と黒い大地、そして一本の桜の木。
由加に話したら、死ぬほど羨ましがられそう――心中で独りごちた鳴美の側に、ひらひらと、銀斑が吹き寄せられてきた。
　「この桜……」
まだ若々しい桜の周りを、裸足のまま、巡ってみる。
程なく、一人の少年の姿が見えた。『真録・太平記』に記された、貴族の姿そのままの少年。
舞い降りる銀斑を、掌にすくう少年の仕草は優しかったが、見つめる瞳は何処か冷たく、人を拒んでいるようにも見える。
　「あの、すみませ……」
　「ソンニバ・ソワカ」
何かを呟き、柳眉がつと動いた瞬間、掌の花びらが、じわりと土塊に成り変わった。
　「依頼の件、片付きましたぞ、義地殿」
声の方を振り向くと、闇中から、独りの少女が現れた。市女笠を取ると、義地と呼ばれた少年は、ふと微笑む。
　「琴子……首尾は如何でしたか？」
　「何時もの如く。義地殿を煩わせるような依頼ではありませなんだ」
　「何故役所の者供は、私を駆り出そうとするのでしょうねぇ。今も昔も、私が術で、琴子にかなう筈が無いのに」
　「……ほほほ。妾も足利の家に生まれておればな……」
琴子と呼ばれた少女は、義地に背を向け市女笠をかぶり直した。垂衣の隙から見えたその目が、強い怒りに歪んでいる。
不意に背筋が寒くなった。
　「あの……琴子、さん？」
少女に手を伸ばしてみたが、鳴美の手は、少女の肩を突き抜けた。
　「馬鹿な話だ」
吐き捨てた義地の言葉に、琴子は苦笑いを浮かべた。
　「……さ、参りましょう義地殿。このような瑣末事で、『準備』をおろそかにする訳にはいかぬ」
　「ええ」
夢だから、干渉は出来ないって事ね――二人の後姿を呆然と見送る鳴美の視界を再び、見えないベールが包み込んだ。

今のが『これから先につながる光景』なら、あの時言われた『準備』とやらは、これから自分が巡り合う出来事に関わっているはず。
鳴美は、思わず唇を噛んだ。
できる事なら、あの二人を追いかけたい――しかし、再び目を開けた時。鳴美は、土塀に挟まれたどこかの小道に立ち尽くしていた。

日は、随分高い。
対に流れる川は、石組みの掘り割りになっているし、土塀の向こうには、裏木戸らしきものが見える。桜しかなかった前の光景に比べると、随分と手が込んでいた。
「まあ……夢だしね」
頷く鳴美の耳に、小さな声が聞こえてきた。
「どうも、お手間を取らせました」
「またどうぞー」
裏木戸が開き、風呂敷包みを抱えた男が、頭を下げつつ退出してきた。異質ではあるが、完全に見慣れたその姿。
「あ、そっか。江戸時代なんだわ」
そんな鳴美の側を、男は沈んだ表情で通り過ぎた。
角を曲がった頃、再び開いた裏木戸から、独りの女が顔を出す。
「あんた、あの職人さん……」
「うん、腕は良いが、いまいち作りが地味でねえ……もう少し、あか抜けてさえくれればなあ……」
「な……なんでそれを、本人に言ってあげないのよ！」
多分、聞こえてはいない。それでも鳴美は大声で叫ぶと、男の後を追って走り出した。
『職人さん』と呼ばれたあの男――きっとスランプか何かで、色々悩んでいるに違いない。
幸い、男は直ぐに見つかった。
男は堀の側に立ち、風呂敷包みの中から取り出した簪を、堀に向かって投げ込んでいた。
穏やかな昼の光を受け、きらきら光る簪が一つ、二つ……涼やかな水音と供に、水底の闇に呑まれていく。
「だ、ダメ、やめて！　皆、応援してくれてるのに！」
当然聞こえているはずもない。
走り寄った鳴美の目前で、男はとうとう最後の一つ――桜吹雪の意匠を飾りに刻んだ簪を、川面に向かって投げつけた。
「そ、そんなっ」
落ちる簪目掛け、両手を伸ばした鳴美の体は、川面の上に投げ出されていた。
堀に落ちる――水に落ちる衝撃に備え、鳴美は息を止め、強く目を閉じる。

身を固くした鳴美の耳に、木の裂けるバリバリという音が響き渡った。小枝の折れる音と、葉擦れの音が追い掛けてくる。
鳴美は、大きく息を吐いた。
「み……水、じゃ……ない……？？」
薄桃色の花霞の中から鳴美の頭が飛び出すのに、それほど時間は要らなかった。
「う、わあ……」
どうやら小高い丘の上の、桜の樹の枝上にいるらしい。
木の幹に縋りながら、鳴美は目一杯体を伸ばし、周囲を見回した。
眼下に広がるミニチュアのような町並みの中、空に突き出た煙突から、煙が幾つも棚引いている。
汽笛の音が、ゆるゆると漂ってきた。
「夢にしたって、ちょっと飛びすぎじゃないかなあ……ここ、何時代？」
鳴美が首を捻っていると、遠くから、二人の男が歩いてきた。
「……とにかくだ。今度すっぽかしたら、幾ら俺でもフォローできない」
「まさか、お前に面倒が降り掛かっているとは思わなかった」
うわっ、軍服っ！！　――鳴美は、そっと聞き耳を立てた。
おあつらえ向きに、二人の軍人は、木の下で立ち止まる。
「じゃあ、俺は宿舎に戻る。今夜はシベリアに出兵する友人と、飲む約束をしてるんだ」
「ああ。また後で……」
気軽く手を振った軍人は、丘を下って遠ざかっていった。
鳴美はそっと、頭をひねった。
「シベリア出兵……？」
残った方の軍人は、目をつぶり、考えに沈んでいた。これ以上、他人事を憂いても仕方が無い……思い切ろうと、首を降ったその時だった。頭上で突然、手を打つ音が響き、女の声が降ってきた。
「あ、ここって……大正時代なんだわ！」
「なっ……」
慌てて上を見上げると、薄桃色の花霞の向こうに、一人の少女の姿が見えた。
髪は郭の禿のように、肩口辺りでザンバラに切り揃え、見た事のない薄衣をゆったりとまとっている。
「ねえ軍人さん、ここって大正時代で……って、あれ？」
「な、何だ……」
「あなた、こんなところにいたの？　もうっ、私一人を夢の中に放り出して……一体何を企んでるの！？」
「じ、自分はお前など知らん！　幽霊でもなければ……すぐに名乗れっ！！」
サーベルの鯉口に、指を掛けた。しかし樹上の少女は、コロコロと笑っている。
「夢なら、分かりそうなものだけど……いいわ、私が名乗ったら、貴方も私に、名前を教えてくれる？」
「幽霊に名乗る名はないぞ」

「あら、失礼ね。幽霊なんかじゃないわよ。私の名前は……」
ざっと、風が吹きすさんだ。
少女の姿が声もろとも、強い風に巻き立つ花霞の中、溶け込むように消えていく。
ふいに風鳴りが止まり、視界が晴れていく。素早く頭上を探したが、少女の姿は、既にない。
もう一度周囲を見回した軍人は、サーベルの鯉口に添えていた指を離した。
そんなに激しい任務をこなした覚えはないが──溜息を付いた軍人は、何事もなかったかのようにその場をそっと立ち去った。

「うーん……」
「……い……おい……大丈夫か……しっかりしろ、時沢　鳴美っ！」
「は、はいっ！！」
フルネームを怒鳴られて、鳴美は文字通りに跳ね起きた。
「こ、ここはっ……ここはどこっ！？」
戻った視界に、見慣れた公園の姿が映る。そして直ぐ側には、黒ずくめの男の人──。
「あの、どちら様？」
「…………俺はお前の同級生、神之邑 颯真だ。いちいち説明するのは面倒だから、覚えておいてくれると嬉しいぞ」
「神之邑君……ホントに？」
鳴美は、思わず首を傾げた。
目前にいる黒ずくめの人物が、あの『優等生』と被らない──ふと気付き、鳴美は指で、ファインダーを作って覗いてみた。
「あ、分かった」
「何が」
「神之邑君、疲れてるのよ。それで人相変わってるんだわ」
颯真の柳眉が、ふと動いた。街灯の光を受けた銀斑が、二人の間を吹き抜けていく。
「そんなに……分からなかったか？」
「うん。何かあったの？」
「いや、何もない。何も……」
「神之邑……っくちゅんっ！！」
いつも厳格な颯真の口元が、ほんの僅かにほころんだ。
「全く、読めんヤツだな。寝ぼけるにしても、ほどがあるだろうに」
「そ、それはそうかも……さ、寒いっ！！」
「当たり前だ。そんな格好で……」
苦笑いを浮かべ、颯真は素早くコートを脱いだ。次の瞬間、黒いコートは、パジャマ姿の鳴美を暖かく包み込む。
少しためらったが、鳴美はコートを抱きしめた。
「ありがと、神之邑君。すごく、あったかい」
「どういたしま……」
にこりと笑った颯真の柳眉が、ぴくりと動いた。
「時沢、動くな」
「えっ？」
颯真の体が飛び退り、今まで立っていた場所を、衝撃が駆け抜ける。
どん、と鈍い音を発して、影は桜にぶち当たった。新たに舞い散る銀斑が、街灯の光に輝く。
「時沢っ、大丈夫！？」
駆け寄ってきた人影が、跳ね返った影を足で器用に操り、颯真と鳴美の間に割り込んだ。
「お前、誰だっ！　時沢に何する気だ！！」
「ひ、樋野君っ！！」
「お前は……確か樋野、とか言ったか」
「……俺を知ってるの？」
「樋野君やめてっ！　よく見て、神之邑君よっ！！」
「へ？　神之邑！？」
克の目が、限りなく丸くなった。

「ごめんなさい……」
しおれ切った克が、颯真に向かって頭を下げた。
「時沢、もうその辺にしておいてやれ。特に殺気があった訳でなし、仮にその気があったとしても、お前如きにやられるような俺じゃあない」
「むぐぐ……」
「何で突然、こんな乱暴な事したの？」
ちらりと、克が鳴美を見た。
「いや、その……そこで練習してたらさ……パ、パジャマ姿の時沢が、黒ずくめの不審者に、肩掴まれていたから……」
「うっ……」
「だから、その辺にしとけと言っただろう。自分の立場を理解してないな？」

「な、何よっ」
「俺は桜の側に転がっていた酔っ払い女だと思って、防犯上の用心の為に声を掛けたんだ。散歩か何かなら、もっとまともな格好をしてこい」
「す、好きで転がってた訳じゃ……」
「大体、こんな夜遅くに、黒ずくめで公園なんかウロウロしている奴が悪いんだよ……」
「職質モノはお互い様だろう。お前こそ、一体何をしてた」
「失敬な奴だな……練習だよ練習、サッカーのっ！！」
「なるほど、良い心掛けだ。子供じみた座興とはいえ、努力を怠る凡百に価値はないからな。死ぬ気で頑張れ」
「一から百までハラ立つヤツだな、お前っ！！」
「はいはい……もう、止めてよ二人ともっ」
「あ、ああ」
「時沢……何か……性格変わった？」
「たまには良いわよ、こんなのも……うふふっ」

「ああ……何かあっちじゃ青春してるわな～」
「目ぇ覚ませ、酔っ払いっ。単なる痴話だろ、みっともねぇ」
「寂しい少年だなぁ、君は……せーっかく老若男女、どっからもモテる要素を持ってんのに」
「うぜーんだよっ。どーして大人って、そういう軽薄な事にしか価値を見いだせねーんだ」
「いいからちょっと大人になれって。今からおにーさんが、イイトコ連れてったげるからさ」
「……何かお前を殺したくなったぞ」
「こわ～い、キレる十代だあ」
「キレいでかっ！　『持ち合わせが無い』って居酒屋に未成年呼び出しやがって！　今度こんな真似してみろ！！」
「なんだよう」
「今日の飲み代、全てお前のお姉様に立て替えてもらうっ！！」
「そそそ、それだけは勘弁してえ！　俺、マジで殺されるー！！」
「ったく！　恩人からは説教喰らって、実の姉からはボコられて、挙句俺にまでコケにされて……お前、それでも大人かよっ」
「何とでもいえぇっ。マジモンの大人にゃ大人なりに、色々あんだよおおっ！！」
「あーもーうぜーってばっ！　びーびー泣くんじゃねぇよ！！」

「……何か、広場がにぎやかね」
「男と、女の子……警察呼んだ方がいいかな？」
「単なる痴話喧嘩だろ。放っておけ」
ふと、会話が途切れた。天使ならぬ、桜の精でも通ったものか──白銀の彩雲を頂いたような木群から、はらはらと銀斑が舞い落ちる。袖を軽く払った颯真が、鳴美と克に向き直った。
「では、俺はこれで失礼する。明日もある事だしな」
「神之邑君……大丈夫？」
冷たいばかりの颯真の頬が、僅かな笑みに彩られる。
「下らんばかりの一時だったが、多少は気が晴れたように感じる。俺も、修行が足りないな」
「そーいうスカした事ばっかり言ってるから、悩みを相談できる友達もできねーんだよっ」
「樋野君っ！！」
「ふふっ、そうかもしれんな……じゃあ、これで」
背を向けると、軽く右手を上げる。冷徹な貴公子めいた少年は、そのまま闇に乗じて消えていった。
「……ちぇっ」
鳴美は、克に向き直った。
「樋野君、いつもと違うわよ？　どうしてわざと突っ掛かるような事言ったの？」
「別に、突っ掛かった訳じゃ……」
「樋野君って、もっと優しい人だと思ってたのに……」
サッカーボールが、克の手から零れ落ちた。そのまま、克は鳴美に向き直る。
かつてないくらい真剣な目に、鳴美はふと、息を呑んだ。
「樋野君？」
「時沢。おれ、大事な事言わないといけない……」
「なぁに？」
「おれさ、は、初めてさ、その……花見の時の事なんだけど……」
「あ、花見の件！　由加から聞いたのね」
「えっ？」
「そうだったの……誘われてない神之邑君が、気を悪くしないようにって……もう、だったらそうと、早く言ってくれればよかったのに！」
「いや……その……」

「由加も由加よねぇ、面倒くさがらずに、私に直接連絡くれればいいのに……何か細かい事言ってた？」
「そ、その事なら、部活が忙しくて、準備するものを中々調べられないから、もう少し待っててくれって……」
「そう……ありがと樋野君。ごめんね、偉そうな事言って」
「そ、そんな事ないよ。おれの方こそ、ごめん」
「さ、私も帰ろっと……これ以上ここにいたら、私、風邪引いちゃいそう」
「あ、じゃあおれ、家まで送るよ。一人じゃ……」
「ううん大丈夫、うちは直ぐそこだから」
「あ、う、うんっ……」
「じゃあね、また明日」
「う、うん…………じゃあ、ね…………」

軽く振り返った鳴美は、颯真のコートを脱いだ。愛用のハンガーをクローゼットから取り出し、丁寧に掛ける。
明日、クリーニングに出してから返そう――デスクの方に向き直りながら、鳴美はふと気が付いた。
「っくちゅんっ！」
私はどうやって、自分の部屋に戻ってきたんだろう？
「ま、いっか……夢だもんね」
窓の外は、濃紺の闇がたゆたっている。いずれにしろ、今日見たハードな夢の光景は、全て時の流れを隔てた、完全に別々の時代で展開していった。これらが『これから先につながる光景』ならば、それらはどんな形で関わってくるのだろう？
「強いて言うなら……タイム・スリップとか？」
自分の発言に、思わず吹き出しそうになった瞬間。

目覚ましのベルが部屋中に鳴り響き、鳴美は慌てて、体を起こした。清冽な朝の光が、重たい瞼を直撃する。
「うっ……あ、あれえっ？」
私ってば、何時、布団で寝てたんだっけ？？
慌てて周囲を見回したが、何処も特に変わった様子はない。コート掛けにも、制服のブレザー以外、何もなかった。
「……夢……？」
背筋にすうと小さな悪寒が走った時、ドアがドンドンと打ち鳴らされた。
「ねーちゃん起きろよっ！　目覚ましうるせえっつーの！！」
「は……ご、ごめんっ」
慌てて目覚ましを止めると、ドアが開き、隼人が顔を覗かせた。
「何だよ、あの大音量の中でも眠れんのか……脳みそ鼻から垂れてんじゃねーの？」
「し、失礼ね……大丈夫よっ」
「まあ、いいけどな。おれ、もう出るから」
「えっ？」

「いってきまーす……っくしゅんっ！」
「ワンワン、ワン！」
「うー……はいはい、クロもね、いってきまーす」
千切れんばかりに尻尾を振る白い愛犬。
慌てて門扉を閉めたせいか、時沢　鳴美は勢い余って、小脇の『真録・太平記』を放り出しそうになってしまった。
「ああ、もう……」
図書館から借りっ放しのこの本。
最近よく眠れていないせいか、少しも読み進める事ができない。
仕方がない、休み時間にでも読もう――本を鞄に仕舞った鳴美は、全力で走り出した。

薄く曇った空の下で、桜は静かに咲いている。
公園のベンチでは、目を閉じた男――鳴美の夢先案内人が、一人でのんびりと座っていた。
「……時流が……割れた……」
無感動に呟く男は、静かに立ち上がった。つむじ風がその背を押すよう、銀斑達を舞い上げる。
「望月の宴……もう直ぐ、始まる……」
花霞の向こうに、男の姿が消えていく。
小枝を踏みしめ、低木の茂みを鳴らしながら、鳴美が広場に飛び出してきた。

# 舞台紹介

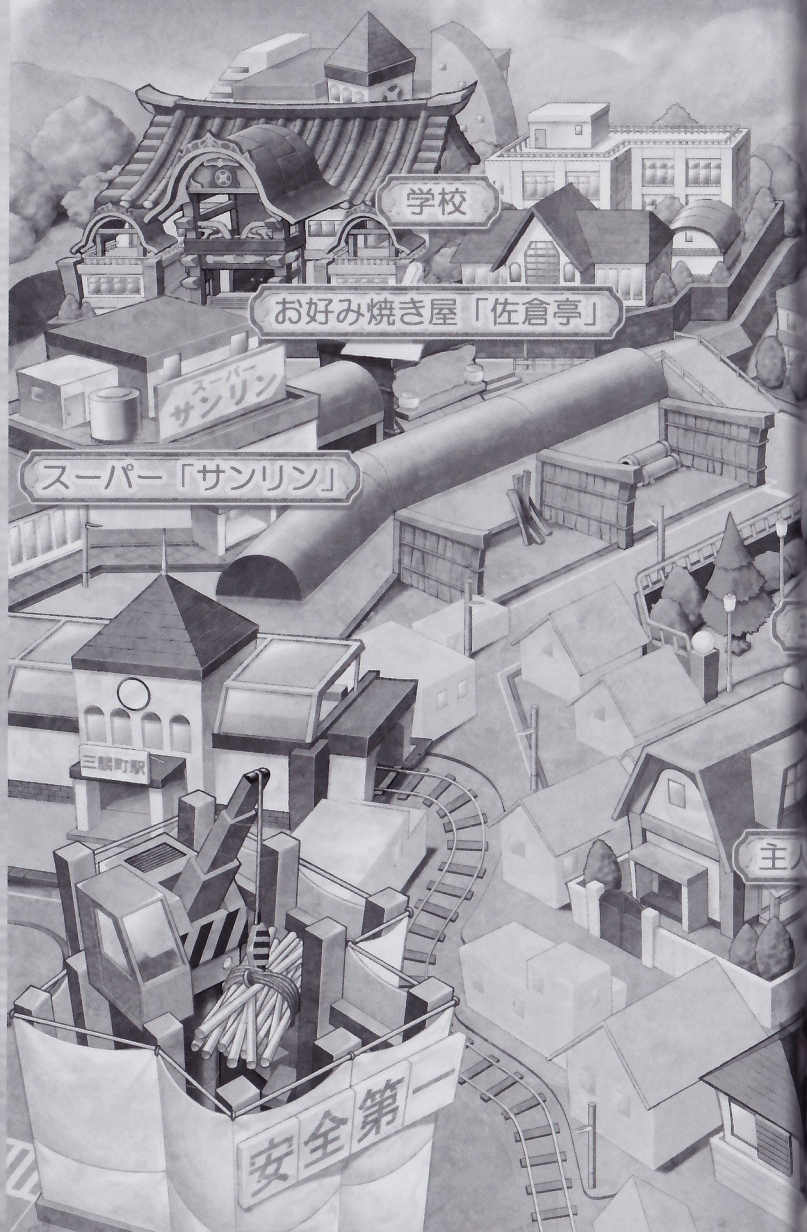
# 現代全景マップ

# 現代全景マップ

<学校>
吾妻高校の教室です。吾妻は吾妻鏡から取りました。レトロで和風だけど今時、という難しい設定を表現してもらった教室です。いい雰囲気が出せているのではないでしょうか。

<お好み屋・佐倉亭>
食事処は外せないポイントの一つです。なぜかお好み焼き屋になりましたが……。
三人前はあると言われるスペシャル焼きは1,000円ぐらいですが、他はかなり安くておいしいと評判のお店です。学校近くにあるので学生達がよく食べに来ます。

＜良治の長屋＞
いかにも江戸らしく、いい感じになっていると思いますが、果たしてかんざしはどこで作っているのでしょうか？

＜河原＞
太鼓橋というか眼鏡橋でしょうか。当時は木製だったと思うので、それっぽい橋を。

# 江戸全景マップ

# 江戸全景マップ

＜路地・大正時代＞
和洋折衷といいますか、大正や明治って独特の雰囲気があると思いますが、それが出せているかと思います。どちらかというと大正時代と言えば洋館を思い浮かべますが……。

＜路地・室町時代＞
カラーの資料などないので、苦労した時代です。室町時代は平安時代と雰囲気が似ていますが、武家社会が色濃く出ていたという点では平安と大きく異なりますね。
食べ物も暮らしも質素だったようです。

# オープニング・エンディング

# Destination

僕達は何を望み　この時代に生まれてきたのだろう
誰と出会う為に

悲しみや苦しみの　あふれるこの世界で
どんな希望や夢を　描き出せるの
君には守るべき人　守ってくれる人がいる
優しさの意味を　誰と見つける

祈り続けて　生命ある限り

＊君の瞳に映るもの　その全て見つめていたい
二人目指す未来へ　この手で導いていこう
光の射す場所まで

君には愛すべき人　愛してくれる人がいる
止む事ない時間の中で
何を共に感じて　分かち合えるだろう

＊君の手を離さず　何処までも歩いていこう
もしこの道の果てに　何が待っているとしても
恐れることはない

君の瞳に映るもの　その全て見つめていたい
二人目指す未来へ　この手で導いていこう
光の射す場所まで

僕達は　この時代を生きて　何を残せるだろう

藤谷桃　プロフィール

1980. 4. 1　東京生まれ
2002. 3月　国立音楽大学器楽学科ピアノ専攻　卒業
2001年頃から曲作りをはじめ、現在はライブハウスやイベントで活躍中

◆FM世田谷”オープンサロン834”ゲスト出演
◆「エビナビナウォーク」CMソング
◆FMやまと”HOLIDAY SQUARE”ゲスト出演
◆文化放送「開け！コンチェルトゲート」エンディング曲

藤谷桃のスケールの大きな曲と透明感のある歌声は、心にジーンと響いてきます。
彼女の作る曲は「夢」「勇気」「希望」等、前向きに生きようとのメッセージが込められており、聴く人を癒し、また元気にしてくれるパワーがあります。

本人のコメント
元気になれたり、優しい気持ちになれたり。
聴いてくれた人の心に何かを残せるような音楽を作り歌っていきたいと思っております。
音楽を通してもっともっとたくさんの人に出会いたい！
これからも応援してください。

# Trace Of Love

I can see your smile　その笑顔が
I can smile again　勇気をくれたから
輝いた日々は　やがてあの夜空を　彩る星になるだろう

歩き出せずにただ　たたずんでいた
小さくなっていく　君の後ろ姿
二度と戻らないことは　わかっているのに
もう少しここで　見送っていたい

I can see your smile　この場所から
I can smile again　また歩き出そう
輝いた日々は　やがてあの夜空を　彩る星になるだろう

君とのかけがえない記憶の中で
二人の軌跡は色あせないから
二度と振り返らない　新しい始まりになる
今のこの瞬間を　ずっと忘れない

I can see your smile even if you're not here
I can smile again　I feel stronger than before
I'm keeping the faith
The greatest gift from god was I ran into you
It'll change into a miracle

I can see your smile　その笑顔が
I can smile again　勇気をくれたから
輝いた日々は　やがてあの夜空を彩るだろう

I can see your smile　この場所から
I can smile again　また歩き出そう
I'm keeping the faith
いつかきっと出逢えるよね　二人がもし運命なら
遠くで星が　二人だけを見守っている
遠くで星が　二人だけを見守っている

オープニング
「Destination」
作詞、作曲　藤谷桃
歌　藤谷桃

エンディング
「Trace Of Love」
作詞、作曲　藤谷桃
歌　藤谷桃

ぜひ色んなルートをプレイして、
楽しんで頂けたらと思います！
ありがとうございました。

貴里みち

悠久ノ桜をご購入頂き、ありがとうございます。
今回初めてアイディアファクトリー様とお仕事させて頂き、
最初は色々と戸惑いもありましたが、
出来る限りのことは盛り込めたと思います。
また今回全シナリオの執筆も手がけましたので是非楽しんで頂ければと思います。

まず今回何より驚いたのが豪華声優陣です。
恋愛対象キャラ以外も全て1キャラごとに声優さんをあてて頂きました。
お陰でより個性的なキャラ達に仕上がったと思います。
声優に興味のない方も、とりあえず大佐の声だけは聞いて下さい
(恋愛対象でなくて恐縮ですが……)。

悠久ノ桜の企画は最初、過去の時代で悪さをする人を成敗する主人公
……という内容でスタートしました。
それが作っているうちにワープと戦いに特化した内容に変化していき、
現在の形になりました。
過去に行くことで現代が少しずつ変わっていくような
……そういう変化も楽しみたいなと思い、
それだと悪さをするのは主人公になってしまうため、
企画内容を変えた次第です……。

それから表現したかった事といえばキャラクターの二面性でしょうか。
これが「悠久ノ桜」の最も大きなテーマとなっています。
姿形ももちろんの事、精神面でもそれぞれに二面性を持っていますので、
こちらも是非楽しんで下さい。

それでは今後ともよろしくお願いいたします。

ヴァンテアンシステムズ株式会社
高木亜由美

## ✿キャスト✿

| | |
|---|---|
| 神之邑 颯真………… | 成田 剣 |
| 樋野 克………… | 岩田 光央 |
| 識守 章都………… | 松風 雅也 |
| 水樹 結………… | 岩永 哲哉 |
| 足利 義地………… | 千葉 一伸 |
| 横井 史郎………… | 稲田 徹 |
| | |
| 桜花………… | 伊藤 葉子 |
| 桜樹………… | 影平 隆一 |
| 神之邑 悠里<br>／神之邑 真源……… | 入江 健夫 |
| | |
| 宮津 琴子………… | 田中 愛子 |
| かなえ ………… | 辻 あゆみ |
| 芙子姫 ………… | 壱智村 小真 |
| 佐藤 由加………… | 祭田 絵理 |
| 時沢 隼人………… | 笹沼 晃 |
| 識守 南都………… | 川淵 由香里 |
| 野島 良治………… | 楠田 敏之 |
| 実島 流之介………… | 加藤 将之 |
| 樋野 草一郎………… | 西松 和彦 |
| | |
| 宗方 和清<br>／ナレーション …… | 屋良 有作 |
| | |
| 義地(幼少期) ……… | ふじた れいこ |
| 妙子 ………… | 古俣 麻弥 |
| 側近 ………… | 西垣 俊作 |
| 術者 ………… | 綱川 博之 |
| 匡時の母 ………… | 村椿 玲子 |
| 良治の妻 ………… | 池崎 リョウ |
| 刺客 ………… | 小助 川巧 |
| 従者 ………… | 佐藤 直喜 |

## ✿設定原画集制作スタッフ✿

原画・キャラクターデザイン
貴里 みち

製本デザイン
水本 安弥子

監修・コメント
高木 亜由美（ヴァンテアンシステムズ）